

001 数えられる名詞でも“a”がつけられない場合とは

✓ その名詞が元の形でなくなった場合は“a”がつきません。

きみの上唇うわくちびるにバナナがついているよ。

There is **banana** sticking on your upper lip.

ふつう“banana”や“orange”などは数えることができますから、1本・個の場合には“a banana”とか“an orange”と「不定冠詞」の“a/an”をつけて言います。

しかし、次のような状況ではどうでしょう？

▶ きみの上唇にバナナがついているよ。

→ There is **banana** sticking on your upper lip.

? There is **a banana** sticking on your upper lip.

(きみの上唇にバナナが1本ついているよ)



上の文では、“banana”は皮をむいて食べるときに上唇にくっついたバナナで、皮がついた1本、2本と数えられる形ではなくなっています。このように元の形ではなくなった一部を表す場合には、数えられる名詞であっても“a/an”をつけることができません。?の文は文法的には可能ですが、これでは手品師がマジックを使ってバナナを丸ごと1本上唇にくっつけているといったような場面しか考えられないでしょう。

▶ 1) 彼は卵をテーブルにこぼしてしまった。

→ He spilt **egg** on the table.

▶ 2) 彼は卵をテーブルの上に落としてしまった。

→ He dropped **an egg** on the table.



1) では卵を割ってお椀に入れようとして、その一部をテーブルの上にごぼしたような場面で、2) は卵1個をテーブルに落としてしまった場面が考えられます。2) のほうが悲惨です。

また、“a lamb”あるいは“lamb”と言えば「羊」ですが、“lamb”と言えば「羊の肉」を指します。同様に、“a chicken”や“chickens”は「鶏」、「chicken」は「鶏肉、チキン」です。

002 “a”を「1つ」以外の意味で使う場合とは(1)

✓ 「ある程度の」のニュアンスになる場合があります。

彼女はスペイン語の心得があります。

She has **a knowledge** of Spanish.

「抽象名詞」は動詞や形容詞などの他の品詞から転用された名詞で、“knowledge”や“kindness”など人間の頭の中にだけある物事を表し、数えられないものとされています。例えば、日本語では「それは1つの知識だよ」と言えますが、英語では×“It is a knowledge.”とは言いません。しかし、次のように“a”をつけて言う場合があります。

▶ 彼女はスペイン語の心得があります。

→ She has **a knowledge** of Spanish.

× She has **knowledges** of Spanish.

この“a”は「ある程度の」のニュアンスです。したがって、彼女は流暢とまではいかないけれど、まあまあ不自由しない程度の「スペイン語の心得がある」というわけです。しかし“a”がつくからといって複数形でできるというわけではありません。

同じ抽象名詞でも、“kindness”はまた少し違います。

▶ 1) 彼は親切心からそう言ったのだ。

→ He said so out of **kindness**.

▶ 2) 彼女は [いろいろと] 親切にしてくれた。

→ She did me **a kindness** [many kindnesses].

1) は純粋な抽象名詞で冠詞はつきません。2) は「親切な行為」という普通名詞に使われています。ただし、複数形で使う場合には、×“She did me two kindnesses.”などと具体的な数詞を伴って使うことはできません。

他では、“a pleasant experience”「楽しい経験」は具体的な個々の経験を指しますが、“business experience”「実務経験」は長期にわたる知識や技術としての経験を指し、数えられない名詞の扱いです。